

奈良・平安初期の書序と進書表について

—「古事記序」再論—

王 格格

私は、博士課程の間、主に勅撰和歌集の序文についての研究を行っている。そのため、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』が成立する以前の、日本書序の歴史についても興味を持っている。

日本における奈良・平安初期の書序についての研究は、ほとんど『古事記』「并序」の文章を出発点として展開したものである。奈良・平安初期の書物に、書序・進書表どちらか一方しか現存しないもの、両方現存しているものがある。又、それらの書序の中、文体特徴がはっきりと進書表と異なっているもの、進書表とだいぶ混同しているものがあり、かなり複雑な事情が見られる。『古事記』「并序」は又、「序」と名付けられながらも、上表文の形式を持っている、文体上曖昧な文章である。先学達は、同時期の書序・進書表の歴史を整理した上、『古事記』「并序」成立時期の推測を試みてきた。

そこで、本研究は先学達の研究を基に、再び奈良・平安初期の書序・進書表創作の実状に迫るつもりである。

先に結論を言ってしまうと、『日本後紀』(840)を境目とし、それより以後、書物を撰進する場合、書序一本で「序」「表」両方の機能を統合するようになった可能性があるのではないかと考えられる。その根拠として、まず、書序の文体特徴が段々と進書表に近づいていくこと。又、『日本後紀』(840)に書物の撰進を記録する場合、挙げた資料は全て進書表であるが、『日本三代実録』(879)になると、進書表の代わりに、『貞観格』(869)『貞観式』(871)両書の書序が収録されていることが挙げられる。

本研究における奈良・平安初期の書序・進書表の創作事情をまとめる作業は、従来検討されてきた『古事記』「并序」の成立時期の推測に役たつのみならず、勅撰和歌集序など、後世序文が成立する「前史」としても多大な意義があると考ええる。

奈良・平安初期の書序と進書表について

—「古事記序」再論—

北京外国語大学 国文学研究資料館 王格格

はじめに

『古事記』の真偽は、従来多く検討されてきた課題である。「偽書説」の根拠は、『続日本紀』（797年）に撰録の記事がないこと、『日本書紀』（720年）に引かれなことをはじめとして、先学たちにより多く提示された。その中、『古事記』の巻首にある「并序」（真福寺本では「序并」、便宜上、以下記序と略す）と名付けられた文章の「偽作説」が挙げられた。この文章の疑わしい点の一つとして、それは「序」と名付けられながらも、明らかに上表文の形式を採った、ということが多くの先行研究に検討されてきた。記序が『古事記』成書された当初、太安万侶が作った上表文であった、という観点は通説化になったようである。しかし、近来、通説に反した三浦佑之氏及び矢嶋泉氏の説があり、記序の文体については、結局、諸説紛紛のままで、未だ検討の余地があると考えられる。

本稿では、先行研究を踏まえた上、文章構成の視点により、記序をその典拠である中国唐代長孫無忌の「進五経正義表」、及び『古事記』より以後、日本本土の勅撰書物のために書かれた進書表（書物を進呈するための上表文）と比べながら、記序の文体について改めて考えていく。

一、記序研究の方向

1、二つの問題点

① 記序の真偽（それは和銅五（712）年太安万侶が書いたものであるか、又は後人の偽作であるか）

「偽作説」：中沢見明『古事記論』・筏勲「古事記偽書説は根拠薄弱であるか（上）（下）」・三浦佑之「古事記「序」を疑う」

② 記序の文体

「真作説」：

「表文説」：河村秀興『古事記開題』・倉野憲司『古事記の研究』・志田延義「古事記上表の諸典拠」・山田孝雄『古事記序文講義』・藤井信男『古事記上表文の研究』等

「序文説」：河村秀興『古事記開題』に挙げられた秀根説・矢嶋泉「古事記成立論の行方——序文研究史の再検討」『古事記の文字世界』『古事記』序文の形式・構造・論理

「偽作説」：筏勲「古事記偽書説は根拠薄弱であるか（上）（下）」

2、「文章構成」の視点

① 三段分けの方法

② 文章構成を文体判別の手がかりとした先行研究

藤井信男『古事記上表文の研究』・矢嶋泉「『古事記』序文の形式・構造・論理」

両氏の論は、いずれにしても不備な所があると考えられるが、彼らの文章構成・構造を重んじる視点は注目すべきである。

3、奈良・平安初期書序と進書表のまとめ

筏勲「古事記偽書説は根拠薄弱であるか（上）（下）」・矢嶋泉『古事記の文字世界』・西條勉『古事記の文字法』

二、記序と「進五経正義表」（付けた番号は【付表】を参照）

記序が中国唐代長孫無忌の「進五経正義表」を典拠としたことは、明治国学者吉岡徳明氏『古事記伝略』により始めて提示された。その上、倉野憲司氏が両文章を比較し、文字に限らず、「敷文構句」までの類似性を指摘した。しかし、倉野氏が行った比較は、文辞に焦点を当てたもので、文章の内容構成には触れなかった。二つの文章の内容を細かく分けて比べてみると、記序は実は「進五経正義表」と大きく異なっていることが分かる。両文章の類似したところは、記序が「進五経正義表」からの模倣であったとすれば、相違した所こそ、記序作者独自の意図を反映しているのだろう。又、これらの相違点により、記序を上表文と見なすことに対して、如何にも違和感を覚える。

問題一：歴史紹介

「進五経正義表」(2-②)：経書と緯書の起源・五経が発揮していた政教作用・五経を闡揚するための学校教育について紹介した後、「斯乃邦家之基、王化之本者也」と、五経が以上さまざまな面により、国政の根本であると言えるほどの重要性を提示した。

「古事記序」(1-②)：「夫混元既凝」から、神代から、神武天皇・崇神天皇・仁徳天皇・成務天皇・允恭天皇の順に従って、各代の天皇の主な功績を並べた。宛も『古事記』本文を抜粋した紹介文のようである。最後に、「雖歩驟各異、文質不同、莫不稽古以繩風猷於既頹、照今以補典教於欲絶」という、歴史・史書の効用を説いた一文により結んだ。しかし、これより前の内容には、歴史を記録すること、又は史書を撰録することについて一言も書かなかった。「進五経正義表」の「斯乃邦家之基、王化之本者也」に習い、無理矢理につけた一文であるような印象がある。

問題二：前代の編纂事業

それぞれ間隔の時期は違うが、『古事記』は『五経正義』と同様に、編纂の事業が二回に分かれた。一回目の編纂についての紹介は「古事記序」(1-③)と「進五経正義表」(2-④)に共通した内容である。しかし、記序はこの部分において、天武天皇が壬申の乱を勝利して皇位に登ったことを詳しく述べてきた。「六師雷震、三軍電逝。杖矛举威、猛士煙起」という戦争の場面を物語のように描いたのは、上表文として不自然なところである。

問題三：稗田阿礼人物伝

稗田阿礼は、『古事記』と同時期の歴史記録に全て見られなく、今までもその真実性が疑われてきた人物である。このように、まるで伝説であるような人物紹介は、正確性・真実性に慎重すべき上表文に、如何にも相応しくないのだろう。

以上により、記序は構成上、一見して「進五経正義表」と近似しているが、「進五経正義表」より、更にいえば上表文より外れた内容は実際多くあることは分かるのだろう。

三、記序と日本本土の進書表（付けた番号は【付表】を参照）

（現在見られる勅撰書物の進書表の中、最古の資料として、『続日本紀』二回の上表文（794年、797年）と『新撰姓氏録』の上表文（815年）を参考とする）

問題一：文章の冒頭内容(1-② 3-② 4-② 6-②)

『続日本紀』一回目の上表文の他、「臣聞」の次、書物内容の意義・効用を説明するための一般論を打ち出すのは各文章に共通する点である。『続日本紀』一回目の上表文は、最初に「沮誦」「伯陽」「班馬」「范謝」という中国代々の史官と史書編纂の歴史について述べてきたのも、この一段の最後「史籍之用、蓋大矣哉」を引き出すためであった。進書表を書く場合、冒頭部分で書物内容の意義と効用提示するのは、日本でも中国でも共通される書き方であろう。つまり、記序第一段の『古事記』本文に記されている日本の歴史を抜粋したような内容は、日本本土の進書表と比較する場合でも、やはり違和感がある。

問題二：前代の編纂事業

『続日本紀』の二回の上表文は、桓武天皇の時代に作成されたもので、前代の光仁天皇時代の撰録を紹介した内容はあるが、光仁天皇の治世を褒め称える儀礼的な言葉は見られない(3-⑤ 4-⑤)。又、「上新撰姓氏録表」にも、前代の桓武天皇時代の撰録について述べた内容がある(6-⑤)。「先朝鑑其假濫、留慮根源、味旦臨軒、仄景忘膳」と書いただけで、『続日本紀』上表文と同様に、前代天皇への賛辞は見当たらない。

記序に見られるような、天武朝における「帝紀」「旧辞」の撰録を述べるために、天武天皇が壬申の乱で勝利した過程・天武天皇の治世について紙幅を費やした内容(1-③)は、以上の進書表と比較する場合、やはり独自性が見出せる。

記序の書き方は、「新撰姓氏録序」(5-④)「弘仁格式序」といった序文の方に近似している。これらの序文において、前代の編纂事業を紹介する際に、まず前代天皇の治世を賛美する言葉を書くのは共通されている点である。

問題三：「編纂方針」の内容(1-⑥ 3-⑥ 4-⑥ 6-⑦)

「編纂方針」は、「古事記序」と『続日本紀』の二回の上表文・「上新撰姓氏録表」に共通する内容である。『続日本紀』の二回の上表文と「上新撰姓氏録表」の当該部分は、撰録のために使用した資料、資料の扱い方、取捨の方針をめぐって紹介した。一方、記序では、『古事記』の撰録資料である「帝王日継」「先代旧辞」は挙げられたが、「編纂方針」において、表記法のみ言及し、撰録資料の扱い方についての内容が見当たらない。

以上、記序を日本本土の進書表と比べてきた。天皇へ上表することには、必ず明確な目的があり、その際に書く上表文は目的を闡明するための文章である。それ故、文章の各部分において、どれほど展開しても、上表の中心内容を十分に説明することが旨で、この旨から外れることはあるべきではない。以上見てきた、記序以外の進書表は、いずれにしてもそのような求心的な性格が見て取れる。しかし、記序は、分析してきたように、主旨から外れた内容が多々あるため、上表文であったことは認めかねる。

四、日本上表文の歴史

中国の場合、例えば『大唐六典』巻一に「凡下之所以達上、其制亦有六、曰表状箋啓辞牒」があるように、「表」は公文書的一种として法令に見られる。しかし、『養老律令』(757年)の「公式令」を見てみると、「論奏」「奏事」「便奏」という、律令制下の最高機関である太政官により出された「奏」についての規定は明確に書かれたが、「表」は見られない。それでは、上表文という文体は、いつから日本において利用され、又、どのような目的に利用されていたのか、ということは問題である。

『続日本紀』(797年)を調べると、文武天皇・元明天皇・元正天皇時代において、太政官の上奏は多く記録されたが、上表に関する記事は、文武紀の三年閏四月辛酉朔の条、文武天皇の詔書に引かれた「新羅国使薩淦金福護表云、寡君不幸、自去秋疾、以今春薨、永辞聖朝」という、新羅国使が進呈した上表文の一例しか見られない。日本国内における上表に関する記事は、聖武紀の四年十一月戊戌朔己亥の条にある、「太政官及八省各上表、奉賀皇子誕生、并献玩好物」という、皇子の誕生を祝賀するための上表が最初の例である。後に、賜姓を請うことや時政の得失を進言することなど、上表の内容が多様になり、上表に関する記事も多くなっていく。しかし、上表の記事が多くなったとはいえ、『続日本紀』において、書物を進呈するための上表は見当たらない。『続日本紀』に、『大宝律令』(701年)と『日本書紀』(720年)の成書についての記録がある。しかし、前者について「撰定律令、于是始成」と、後者について「至是、功成奏上。紀卅卷、系図一卷」と書いてただけで、その際に書物を進呈するために上表文が書かれたかどうかについて、明確な記述がない。これらの書物は、現存資料で見た限りでは、序文も進書表も付けられていない。進書のための上表は、後の時代の『日本後紀』(840年)に記された、桓武天皇の延暦十三(794)年に『続日本紀』を献上した際の上表文は最初である。

以上見てくると、元明天皇時代の前後には、日本国内において上表文はまだ使われていなかった可能性がある。しかも、後の時代になると、上表文がますます多くの目的に使用されるようになったが、おそらく桓武朝より以前、勅撰書物を進呈するために上表文を書くことはなかったのではないかと推測した。

【付表】

1、古事記序	①臣安萬侶言 ②神代からの天皇の歴史(夫混元既凝～照今以補典教於欲絶)③天武天皇の登極・治世賛美・一回目の編纂(暨飛鳥清原大宮御大八洲天皇御世～未行其事矣)④伏惟 ⑤元明天皇治世賛美・下命(皇帝陛下～以献上者)⑥編纂方針(謹随詔旨～随本不改)⑦体例(大抵所記者～謹以献上)⑧臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首(日付・位署)
2、進五経正義表	①臣聞 ②五経の歴史・五経の意義(混元初辟～王化之本者也)③伏惟 ④今上の治世賛美・一回目の編纂(皇帝陛下～尚有未周)⑤下命(爰降糸綸～傍撫群書)⑥編纂事情(釈左氏之膏肓～繕写如前)⑦謙辞(臣等学謝伏恭～惧乖典正)⑧謹以上聞、伏増戦越。謹言(日付・位署)
3、上続日本紀表(一回目)	①臣聞 ②中国修史の歴史・歴史の意義(黄軒御曆～蓋大矣哉)③伏惟 ④今上の治世賛美・下命(伏惟聖朝～以継先典)⑤前代の修史(若夫～類無綱紀)⑥編纂方針(臣等～以備故実)⑦体例(勒成一十四卷～其目如左)⑧謙辞(臣等、学謝研精、詞慙質弁、奉詔淹歳、伏深戦兢)
4、上続日本紀表(二回目)	①臣聞 ②中国修史の歴史・歴史の意義(三墳五典～千祀之指南)③伏惟 ④今上の治世賛美・下命(天皇陛下～奉揚先業)⑤前代の修史(夫自宝字二年～全亡不存)⑥編纂方針(臣等～並從略諸)⑦体例(凡所刊削廿卷～其目如別)⑧結び(庶飛英騰茂～伝万葉而作鑑)⑨謙辞(臣等輕以管窺～伏増戦兢)⑩謹以奉進、帰之策府
5、新撰姓氏録序	①蓋聞 ②姓氏の歴史(天孫～輟而不興)③前代の治世賛美・一回目の編纂(皇統～鳳輿登遐)④今上の治世賛美・下命(天朝至明～尋諸氏之苑丘)⑤編纂方針(本其元生～煥乎指南)⑥体例(起自神武～名曰新撰姓氏録)⑦結び(雖非～列於別卷)⑧云爾
6、上新撰姓氏録表	①臣万多等言。臣聞 ②姓氏の意義(陰陽定位～襲王風而興替者也)③伏惟 ④姓氏の歴史(国家～虚記黻冕)⑤前代一回目の編纂(先朝鑑其假濫～仄景忘膳)⑥受命(今臣等謹奉綸言～空淹四時)⑦編纂方針(夫才非博物～則集為別卷)⑧体例(年肇神武～名新撰姓氏録)⑨謙辞(譬如窺井談星～撰緝謬違)⑩謹詣闕奉進、伏増谷氷、謹白(日付・位署)